

横田健一著

『日本のマッチ工業と滝川儀作翁』

小山 仁 示

明治三〇年代前後のわが国の労働事情をあきらかにした名著『日本の下層社会』は、「児童の労働を見るに最も恰好の材料を得るもの」として、阪神地方のマッチ工場をとりあげている。そのなかで、著者横山源之助は、つぎのようにのべている。「労働者の研究を別にして、一の事業として之を見るも燐寸は幾多の方面に於て研究の価値あり、以て我国工業の一端を見るを得べく、海外貿易の現状を知るの材料ともなすを得ん」と(岩波文庫版、一二九ページ)。

明治期におけるわが資本主義の急速な発展のなかで、マッチ工業のしめる位置は、たしかに注目すべきものがある。低廉な過剰労働力を駆使し、政府からたいた援助をうけることもなしに、たちまちにして隆盛をきわめたマッチ製造業は、明治一〇年代初期にはやぐも輸出産業の花形として、清国市場で外国

製品と対抗するにいたり、二〇年代後期には総産額の実に七五パーセントを外国に輸出するという特異な存在であった。そしてかかる日本マッチのほとんどは、大阪と神戸で製造されたのであるが、大阪の製品がインド向けの黄燐マッチであったのに対し、神戸のそれは清国向けの安全マッチであったという点で、神戸のマッチ工業の方が事業的に優勢であり、生産額・輸出額においても、ほぼ常に神戸が大阪を圧倒していた。この神戸のマッチ業界に君臨し、小経営の多い同業者のなかで、近代的な機械設備で大量生産をおこなって、世界の覇者スエーデンマッチとのぎをけずったのが、創業者滝川弁三のあとをついだ養嗣子滝川儀作(一八七四—一九六三)であった。

したがって、滝川儀作の九〇年におよぶ生涯の伝記は、たんに一人のマッチ資本家の頭

彰碑におわるべきものではなく、わがマッチ工業の明治・大正・昭和三代にわたる発展と変転の歴史をあきらかにすることであらねばならず、それは同時に日本資本主義発達史の重要な側面としてとらえられなければならないものである。横田健一教授が著わされた『日本のマッチ工業と滝川儀作翁』(一九六三年五月刊)は、まさにそのようなものとして執筆されたものであり、A5判四四二ページにおよぶこの大著の内容は、たんなる伝記のわくをはるかにこえて、学術的のみにゆたかたか、資料的にはなほ貴重なものを含む一大力作となっている。

本書の内容を目次によつてみると、つぎのとおりである。

はしがき—本書編述の経緯および意図と方針

- 一 誕生・幼年時代
- 二 少年時代から青年時代へ
- 三 滝川弁三とマッチ業の創始
- 四 青壮年時代—マッチ專業と業界合同問題
- 五 神戸商業會議所会頭時代(第一回)
- 六 神戸商業會議所会頭時代(第二回)
- 七 大同燐寸株式会社社長時代
- 八 破局
- 九 マッチ業以外の諸分野における活躍

一〇 日中親善への努力

一一 森林保護ならびに治山治水事業

一二 現況

一三 滝川儀作翁の逝去と葬儀

従四位勲三等 故滝川儀作翁葬儀 弔

辭

年譜

これを見てわかるように、滝川儀作の九〇年の生涯と事業がますますことなく記されているわけであるが、本書の叙述を一貫して流れる著者横田教授の歴史学者としての真摯で創造的な学問態度は、伝記の分野において高度な開発性をうみだしたというべきであり、学界への寄与は大きなものがある。

個人を顕彰するためにかかれた伝記というものは、とすれば、その人物の長所・美点のみをかきつらね、きれいごとにおわりがちなものである。伝記の著者・編者が、当人の恩顧をうけた関係者である場合はもちろんのこと、伝記作者は主人公にほれこまなければならず、少なくとも精神的にうちこまなければすぐれた著述ができないといわれるほどであるから、筆者のそのような心理がいきすぎ、無意識のうちに叙述が一方的にかたむき、都合のわるいと思われることはおおいにかくし、あるいは消極的に表現し、都合のよい部分のことさらに強調する傾向が生じてくるもので

ある。その意味で、伝記をかくことは、理性的・科学的態度を要求される歴史研究者にとって、まことにむづかしいものといえよう。

伝記のなかにえがかれた人物像に、ほかならぬ筆者自身の学者としての能力と学問態度が正直に投影されてしまう。そのうえ、当人が生きていたり、もしくは関係者が数多く生存している近代・現代の人物の伝記の場合は、社会的・心理的に叙述上の制約を多くうけ、その制約とのぎりぎりの線での妥協・調和ということも、また筆者の能力にかかってくるものである。このような伝記執筆の困難さをつねづね感じ、方法的に思ひなやんでいた私のような後学のものにとつて、横田教授があらわされた本書は、伝記叙述方法論を実際に示してくれたものとして、大いなる啓発となつた。

かかる意味から、「本書編述の経緯および意図と方針」を端的にのべられた本書の「はしがき」は、歴史家のとるべき伝記叙述方法論として、まことに価値あるものといわねばならない。横田教授は、つぎのようにのべられる。

「本書は小説ではない。読者の感覺的、情緒的な興味に訴えることを意図するよりも正確な事実を、ありのまま出して、読者自身に理性的に判断してもらつた資料を、提供

することにつとめた。したがって記述の表現は、小説家やジャーナリストの書く伝記のような、おもしろおかしく誇張した表現や、想像をめぐらした叙述は意識的に抑えかけたのである。」

かくて本書では、時代の背景や環境の説明、数字・統計表や書翰・演説内容に多くのページがさかれているが、それらは著者の叙述意図からして、十分な有効適切性をもって生かされている。滝川儀作の母の生家に関連しての天誅組の叙述なども、伝記としてはたしかに型破りであろうが、一人の人物の精神形成の重要な要素を読者のまえに提示して、読者に考えさせる資料を提供したという意味で、冗漫でも無駄でもなく、これこそ歴史家のかく伝記としての本来の姿であると思う。そして全編が、この調子で貫かれているのである。

そのうえ、本書は決して読者を退屈させるようなものではなく、反対に興味をひきつける魅力をもっている。著者自身が自負されるように、スエーデンマッチとの抗争、マッチ王クルーガーの生涯と事業、日本マッチ業界における滝川儀作の立場と行動など、興味深々たるものがある。あるいはまた、マッチ製造のようなものでが大久保利通の指示で本格的生産に入ったという事実、今さらなが

ら維新政府の殖産興業熱のたかきを知り、さらに神戸港輸出品に課せられた五厘金の実体と歴史的経緯の詳細な説明によって、五厘金を清国商人への手数料とのみ考えていたあまりがただされたことなど、あげていけばきりがないほど、歴史的事実について教示されること多く、名門滝川中学校の創立事情などは、本書への親近感を大いにいだかせる話である。

こうして本書は、単なる一人の実業家の伝記ではなく、学界未開拓の分野たる日本マツチ工業史の研究書として成功しており、しかも神戸の財界史・教育史・文化史の側面をもかねあわすという、まことに豊富な内容を含んだ一大労作となっているのである。歴史を学ぶものは、この書を通じて、日本近代史の重要な一面を知ることができるとともに、歴史学はいかにあるべきかを教示されるであろう。本書著述に多大の理解を示された滝川家の方たちの態度に感銘をうけ、資料提供・調査などに協力された多くの人びとの労をたたえるところにも、かくもすぐれた大著を完成された横田教授に深甚なる尊敬の念を表した。 (日本のマツチ工業と滝川儀作翁刊行会刊、神戸市兵庫区水木通り二の三、非売品)

祖谷地方調査日記

史学研究部

祖谷地方とは、徳島県三好郡東西両祖谷山村を指している。日本三大秘境の一つで、四国山脈の剣山に源を発する祖谷川上流流域、峻険なる山岳地帯に存在する部落である。

われわれはこの地方を長期にわたって調査する為、今夏は予備調査として、学生十七名をもって構成する調査員を、西祖谷山村一宇周辺、同西岡・徳善周辺、そして小祖谷方面に派遣して、八月五日から八月十三日まで調査した。

x

八月五日、午前七時十五分、南海ナンバ駅に集合し昼過ぎ徳島県に到着、徳島県教育委員会近藤亮一氏、県史編纂の金沢治氏に入山の挨拶をして、夕方櫛生中学校に到着。

八月六日、西祖谷山村役場に調査始めの挨拶の後、各班調査目的地へ出発。

八月七日、第一班(一宇方面)は喜多昌重氏宅を訪問し、祖谷地方の歴史の概説を承る。櫛生小学校教頭森下重義氏宅を訪問。

第二班(西岡・徳善方面)は徳善正美氏宅

を訪問し、中世文書を採集する。後青山行夫氏、上山実氏、山西新氏宅訪問、ここで郷土についてうかがう。夜、中井氏等と祖谷伝説について承る。

第三班(小祖谷方面)は桃平氏に地形、歴史、民俗等についてうけたまわる。

八月八日、第一班 有瀬貞市氏宅を訪問して有瀬名について承る。

第二班 有宮神社神宮西岡氏宅を訪問。第三班 台風の影響で調査中止。

八月九日、全班台風の影響で調査中止。ここで計画通り、第三班は本部に到着。

八月十日、第一班、戸ノ谷名の前川嘉吉氏に森食堂で偶然会い、戸ノ谷名、尾井ノ内名について承る。再び有瀬家を訪問し調査す。第二班、本部に到着。

八月十一日、全員で調査報告会を催し、夜間限定名の中江氏宅を訪問。

八月十二日、重末名の喜多源内氏宅を訪問。ここで政所の職務について承り、「祖山一族中」とある文書を写す。一年次生は一宇周辺で平家伝説についてのアンケートをとる。夜、京都・大阪・神戸の幻燈会を催す。

調査を終えて、最初より御世話になった後藤捷一先生、役場当局、学校関係各位よりの御協力を、紙上を借りて衷心より感謝の意を表する次第である。(三年次石川 記)